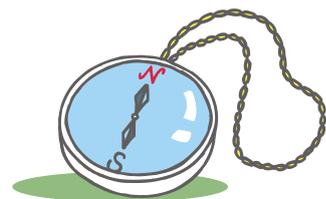


羅 針 盤



第**20**号

令和2年（2020年）9月28日（月）

◆ 『法隆寺を支えた木』

昭和最後の宮大工と言われた西岡常一（にしおかつねかず）氏と、木材工学を究めた農学博士の小原二郎（こはらじろう）氏が、別々に書いたものを一冊の書籍としてまとめあげた本、それが『法隆寺を支えた木』です。著者である小原二郎さんは、「西岡常一さんの話に私が解説を加えた本」とおっしゃっていますが、同じ「木」という共通のテーマをもとにして、西岡さんは「自分自身が宮大工としてなるべくして育てられことと、そして、法隆寺や薬師寺などのお寺の復興に尽力されてきた中で学びとったこと」について語られており、一方、小原さんは「西岡さんの話の中から、特に木についての部分をまとめながらも、科学的な説明を加えて」書かれています。この本の中では、「ヒノキ」という木材の素晴らしさが何度も強調して語られています。西岡さんの話からは、「法隆寺の建物は、ほとんどがヒノキ材でつくられていて、主要なところは、すべて樹齢一千年以上のヒノキが使われ、そして、そのヒノキは千三百年を過ぎてもビクともしていない」ということが語られています。そして、「大切にすれば、千年、二千年ももつ木のいのちを、なぜ今の時代では百年はおろか、二～三十年で絶つような使い方をするのか」と訴えかけられています。豊かな時代に暮らす私たちは、西岡さんが言うように、木のいのちを二～三十年で絶つような使い方をしてはいないでしょうか。物を大切にすることを忘れずに、木の特性を生かすことができれば、木のいのちを脈々と息づかせて使うことができるはずなのに、便利であることを最優先してしまっていたり、目先の出来事の対処にばかり気を巡らせていては、本当に大切なものの正しい使い方を見失っているのではないかと思われてなりません。「ヒノキ」が生んだ世界最古の建造物であるといわれる法隆寺の姿に、「ヒノキ」の持つ力の凄さを感じると同時に、「木」から学ぶべきことを今一度振り返ってみる機会とする必要があると思います。

◆ 「第二の水泳人生」

白血病で長期療養をしていた競泳の池江璃花子選手が、8月29日に行われた大会に出場し、1年7か月ぶりにレースに戻ってきました。昨年2月に白血病が判明した当時、池江選手は「神様は乗り越えられない試練は与えない。必ず戻ってきます。」と、闘病への決意や励ましへの感謝の気持ちを表しました。また、5月には「ありのままの自分を見てほしい」と治療の影響による短髪姿の写真を公開し、「誰かにとっても、小さな希望になればうれしい」とつづり、多くの人に勇気を与えました。その後、オリンピックの開催延期に伴って、7月に国立競技場で開かれた東京五輪開幕1年前のイベントでは、ランタンを手に競技場に芝生に立ち、希望や目標を持つ大切さを説くメッセージを世界に発信し、「これからも、感謝と尊敬を胸に、前に進んでいこうと思う。一人のアスリートとして。一人の人間として。」と語っています。「第二の水泳人生」が始まり、プールサイドで涙した彼女の姿からは学ぶべきことがたくさんあると思います。

